

とつてはそのことのほうが、あの日に起つた出来事よりも間違いくるはるかに重要なんだ。私は6ヶ月の出場停止処分を受けて、シーズン終了までプレーできなかつたので、ワールドカップに臨む代表メンバー争いからも外されてしまったね」

——ワールドカップでプレーするチャンスを失つたことは、あなたにとって残念なことですか?

「もちろん残念だつたよ。ワールドカップ出場は選手にとって夢だからね。あのとき私はかなり若かったけれど(当時21歳)、代表に入るチャンスはあると知つていたから、がっかりした。しかし、出場停止処分を受けてしまつたのだからどうしようもない。まあ運良く8年後に、クロアチア代表として1998年ワールドカップフランス大会に出場したから良かったけどね」

——1991年5月、あなたはユーゴスラビア代表としてベオグラードでユーロ92予選のフェロー諸島戦に出場しました(スコアは7ー0)。1991年の春の時点で、ユーゴスラビアの終焉が近づいていたことはすでに確実で

したが、そのことを試合中に感じましたか? また、そのときのチーム内の雰囲気はどうでした? 選手同士で政治の話をしたり、内戦の可能性について話し合つたりしたのでしょうか?

「率直に言えば、当時はまだユーゴスラビアに実際に何が起つるのか誰にもわからなかつたよ。それにチーム内の雰囲気は良く、チーム外の事情など入り込んでいた。私はいつも、どのチームでプレーするときであつても、全力を出していた。その試合のときもプロフェッショナルな姿勢で臨み、やる気に満ちていた。それからあの試合は、サフエト・スシッチのような素晴らしい選手に代わつて先発で起用してもらつたことでも記憶に残つている。試合前にスシッチは私を励まして、代表での後継者になって欲しいとはっきり言つてくれた。偉大な選手から認められたんだと思ふ、感激したことによく覚えているよ。それと、この一戦に関して言えば、レッドスター・ベオグラードのスタジアムの観客について特別な気持ちがあつたね。一年前のディナモ対レッドスター戦のキックオフ前に

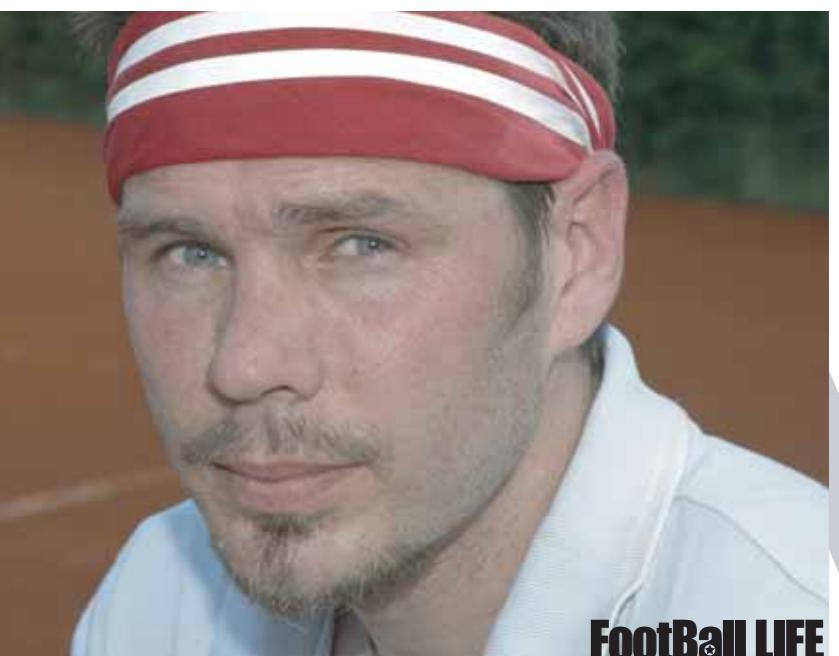
起きたあの出来事以来、私がベオグラードでプレーする初めての試合だったこともあり、正直なところ、聞こえてくるのはブーイングばかりだろうと予想していたんだ。ところが、私は拍手で迎えられ、試合中も応援してもらつたんだ。これは私にとって、一般的の国民にとっても、大いに驚かされた出来事だつた。それから、この試合が記憶に残つてゐる訳は、A代表でデヤン・サヴィチと一緒にプレーする機会を与えられた嬉しさのせいでもあるんだ。彼とのプレーが実現することをずっと前から待ち望んでいたのに、私たちが代表で一緒にプレーしたのは、実はこの試合が最初で最後だつたんだけどね。しかし、それはあとで埋め合わせをすることができた。ミランのチームメイトとして何試合も一緒にプレーして、チャンピオンズリーグ決勝も共に戦つたのだからね」(1993-94シーズンのアテネ開催の決勝戦で、ミランがバルセロナに4-0で勝利した)

——あのフェロー諸島戦に関してですが、クロアチア人選手がユーゴスラビア代表としてプレーするのはこれが最後になります

スピリットも雰囲気も最高だったのを覚えてるまいだからね」
——1999年8月にベオグラードのレッドスター・スタジアムで行われたユーロ2000予選ユーゴスラビア対クロアチアのビッグマッチに対する印象や感想を教えてください。たとえば、キャプテン同士のあなたとレッドスター・ミヤトヴィッチがキックオフ前に抱き合つたのは、とても良いシーンでした(試合結果はスコアレスドロー)。

「いや、それはお互いをよく知つてゐる選手同士ならよくあることだよ。なんといつても、ミヤトヴィッチと私は1987年にワールドユース・チリ大会で一緒にプレーした仲だし、ずっといい関係を保つてきましたからね。ベオグラードでのあの試合は、我がチームの優れたパフォーマンスが一番記憶に残つてゐる。マラカナ(レッドスター・スタジアムの愛

称)では本当に素晴らしい力を発揮することができた。ただ、私は万全の体調ではあの試合に臨めなかつたんだ。ケガから復帰したばかりで、プレーできるかどうかわからなかつた。でも、あまりにも重要な試合だから、出場することに決めた。始まってみると、ゲームを支配しているのは私たちで、クロアチアのプロサッカー選手の中でも飛び抜けた世代の真の力を示すことができたよ。その後の第2戦では、セルビア・モンテネグロ(編集部注:当時の名称はユーゴスラビア代表)のほうが私たちよりもスキルがあつて運も良く、ユーロ本大会出場を決めたんだ(ザグレブでの対戦のスコアは2-2で、ユーゴスラビアはグループ1位、クロアチアは3位に終わった)。ベオグラードでの試合について言えば、停電があつて場内が暗くなつたことは



FootBall LIFE

ズボニミール・ボバン●1968年10月8日生まれ。クロアチア、イモツキ出身。1985年にディナモ・ザグレブでプロデビューし、1991年にイタリアのパリに移籍。翌シーズンの92年には名門ミランの一員となり、チャンピオンズカップ優勝、スクдетなど数々の栄光を手にした。2001年にスペインのセルタにレンタルで移籍するも、1シーズンで現役を引退。1987年にはユーゴスラビア代表としてワールドユースを制覇。1991年に独立してからは、クロアチア代表として1998年ワールドカップで3位に輝いた。代表キャップは旧ユーコーで7、クロアチアで51を記録。



B O B A N

思はせるような出来事とか、何かそういう興味深いエピソードは思い出せませんか?

「思い出せないね。さつきも言ったように、チームの雰囲気もドレッシングルームの雰囲気も普通だつたんだから。それまでの他の試合とまったく変わらない、スポーツそのものの雰囲気だ。あの頃の代表チームはとても強くて、一緒にプレーするのが楽しかつた。政治の話などしなかつた。少なくとも、誰かがそんな話をしていたかどうか私にはわからない。でも、クロアチア出身の選手がユーゴスラビア代表として出場したのはこの試合が最後だつたのは事実だ。だけど、それは仕方のないことだつた。1991年6月に内戦が始まつて、その後すぐにクロアチアは独立したのだから。それ以降ずっと、私はクロアチア代表としてプレーした」

当時のユーゴは刺激的だつた でも今はクロアチアがすべてだ

——もしも戦争が起らなかつたとして、ユーゴスラビアが分割されずに一つの国ままでいたら、ユーゴスラビア代表は大変な

強豪となり、ワールドカップや欧州選手権で優勝の本命と目される国になつたはずだという意見をよく耳にします。しかし、あなたの元チームメイトであるスラヴェン・ビリッチは、最近のインタビューで、クロアチアは非常に優秀なチームだから、旧ユーゴスラビアに含まれるその他の共和国の選手は誰も必要なかつたと言つています。あなたはこれについてどう思われますか?

「私の意見も、実はビリッチと同じなんだ。クロアチア代表は見事なチームだつた。まずはイングランド開催のユーロ96(クロアチアは準々決勝進出)で、そしてとりわけ2年後の1998年ワールドカップフランス大会(クロアチアは3位)で私たちが見せた快進撃がその一番の証拠だ。もしも旧ユーゴスラビアの代表がそのまま分裂せずにいたとしても、どのような結果を残していたかは疑問だよ。旧ユーゴスラビアのサッカー史の中には、さらに優れた世代や選手が存在していたのかもしれないが、それでも大きな成功は一度も成し遂げていない。その理由は、一つのチームを構成する要素はたくさんあって、選手の

資質だけに左右されるわけではないからなんじゃないかな。たとえば、チームスピリットや優秀な組織などといったものが、結果を残せる素晴らしいチームを作り上げるための要素なんだよ」

——旧ユーゴスラビア代表のブランコ・オブラク(クロアチア出身)はあるインタビューの中で、クロアチア人選手とセルビア人選手の関係には、ずいぶん嫌な思いをさせられたときもあったと言つています。彼の話によると、チームの調子が良くて試合に勝てば万事オーケーだったけれど、調子が悪くなると突然不快な状況が生じたとか。たとえばあなたがユーゴスラビア代表としてプレーしたときに、そういう出来事を経験したことありますか?(ボバンはユーゴスラビアA代表として7試合に出場し、ユース代表としての出場試合数は多数にのぼり、1987年のワールドユース・チリ大会では優勝を遂げている)

「私自身は、オブラクが話しているようなこと経験する機会はなかつたね。たとえば、ワールドユースでプレーしたときは、チーム

スピリットも雰囲気も最高だったのを覚えてるまいだからね」
——1999年8月にベオグラードのレッドスター・スタジアムで行われたユーロ2000予選ユーゴスラビア対クロアチアのビッグマッチに対する印象や感想を教えてください。たとえば、キャプテン同士のあなたとレッドスター・ミヤトヴィッチがキックオフ前に抱き合つたのは、とても良いシーンでした(試合結果はスコアレスドロー)。

「いや、それはお互いをよく知つてゐる選手同士ならよくあることだよ。なんといつても、ミヤトヴィッチと私は1987年にワールドユース・チリ大会で一緒にプレーした仲だし、ずっといい関係を保つてきたからね。ベオグラードでのあの試合は、我がチームの優れたパフォーマンスが一番記憶に残つてゐる。マラカナ(レッドスター・スタジアムの愛

称)では本当に素晴らしい力を発揮することができた。ただ、私は万全の体調ではあの試合に臨めなかつたんだ。ケガから復帰したばかりで、プレーできるかどうかわからなかつた。でも、あまりにも重要な試合だから、出場することに決めた。始まってみると、ゲームを支配しているのは私たちで、クロアチアのプロサッカー選手の中でも飛び抜けた世代の真の力を示すことができたよ。その後の第2戦では、セルビア・モンテネグロ(編集部注:当時の名称はユーゴスラビア代表)のほうが私たちよりもスキルがあつて運も良く、ユーロ本大会出場を決めたんだ(ザグレブでの対戦のスコアは2-2で、ユーゴスラビアはグループ1位、クロアチアは3位に終わった)。ベオグラードでの試合について言えば、停電があつて場内が暗くなつたことは

「実を言うと、ユーロ2000のその試合は見ていないし、今度のワールドカップの予選については、セルビア・モンテネグロの試合のハイライトを何度か見ただけなんだ。でもやっぱり昔のよしみという理由だけで、彼らの幸運を祈りたいとは言えないね。それに、ある特定の選手か、チームか、あるいはその状況に共感できるかどうかにもよると思う。私個人としては、国際試合に関する限りは、故郷クロアチアの代表としてプレーできた喜びの気持ちでいっぱいなんだ。このチームでプレーすることで、サッカー選手としての夢をすべて叶えてきたのだからね」